

～地域づくりは、人づくり～

地域コミュニティ再生における社会教育の役割

平成21(2009)年3月

尼崎市社会教育委員会議

目 次

<u>1 はじめに</u>	1
<u>2 地域で取り組んでいる実践活動（社会教育委員3人の実践事例報告）</u>	2
<u>(1) 大庄小学校校区における安全・安心のまちづくり</u>	2
<u>(2) 尾浜地区における地域通貨を活かしたまちづくり</u>	2
<u>(3) 園田東小学校校区における子ども会夏祭りを通したまちづくり</u>	3
<u>3 地域で取り組むべき活動</u>	4
<u>(1) 安全・安心な地域コミュニティづくり</u>	4
<u>(2) 子どもや高齢者が過ごせる安全・安心の拠点づくり</u>	5
<u>(3) 地域で子ども・若者を育てていくこと</u>	5
<u>(4) 大人の意識の向上と新しい地域リーダーの発掘</u>	5
<u>(5) 学校・家庭・地域一体型のコミュニティづくりの推進</u>	6
<u>4 地域コミュニティ再生に必要な要素</u>	6
<u>(1) 「人・主体」</u>	6
<u>(2) 「継続性・持続性」</u>	7
<u>(3) 「地域の特性・独自性」</u>	8
<u>5 社会教育委員と社会教育行政の役割</u>	9
<u>(1) 社会教育委員の役割</u>	9
<u>ア 委員各自の見識を向上させ、住民の意向を把握する</u>	9
<u>イ 現状視察や住民の意識・地域の実態を把握する</u>	9
<u>ウ 委員自身の主たる活動、得意分野の活動から「人づくり」を行う</u>	9

<u>エ 行動する社会教育委員を増やす</u>	1 0
<u>オ 地域の住民が活動に取り組むような「なびく風」をつくる</u>	1 0
(2) <u>社会教育行政の役割</u>	1 0
<u>ア 支援の方向性</u>	1 0
<u>イ 情報を集積し、適切に提供する</u>	1 1
<u>ウ 人的資産や地域の協力を生かす</u>	1 1
<u>エ 小学校区を単位とする地域コミュニティの再生を図り、地域社会の形成に資する</u>	1 2
<u>オ 行政総がかりで地域づくりの活動を奨励する</u>	1 2
 (参考資料)	
「地域で取り組まれている実践事例」	1 4
<u>大庄小学校区における安全・安心のまちづくり</u>	(村尾 典雄 委員)
<u>地域コミュニティ再生に向けた地域通貨おう発行事業</u>	(塩見 幸治 委員)
<u>子ども会夏祭りを通したまちづくり</u>	(平良 一夫 委員)

「地域コミュニティ再生における社会教育の役割」

1 はじめに

「水と安全はタダ」と言われたかつての日本社会は、地域社会が営々と培ってきた地縁関係等を中心とした地域コミュニティが底支えしてきたものであるが、近年、少子高齢化による人口構成の変化や急激な経済状況のグローバル化等の社会情勢の著しい変化に伴って、そうした地域コミュニティは瓦解したといえる。「安全・安心のまちづくり」を標榜しなければならなくなっているほど多様化・複合化した問題が生じてきている。

今こそ地域コミュニティを構成する学校・家庭・地域住民が共に心を通い合わせ、共に実践すべきことが求められ、社会教育に課せられた役割はますます大きいものとなっている。

こうした認識の上にたって、尼崎市社会教育委員会議は、多岐にわたる社会教育の課題やあり方、役割を見つめ直し、「尼崎市社会教育計画」を策定した（平成19年8月）。この中で提唱しているものの一つに「小学校区学習センター構想」がある。

この構想では、市民同士が身近に顔をあわせ語り合うことができるコミュニティの単位として、小学校の校区が適正であると考えている。この構想に示された社会教育のビジョンを明確に実現化していくためには、どのような地域コミュニティの姿が求められるのか、また、地域づくりの具体的な方策、方向性を見極めて取り組む必要がある。

現在の地域社会は様々な課題を包括しているにもかかわらず、人と人とが連携して地域全体をよくしようとする意識が希薄化しているともいえる。市内では市民自らが多様な特色ある団体等を形成し、社会教育活動を積極的に行っている地域もあるが、すでに顕在化している地域課題に無関心な地域も多くあり、地域課題を解決していくために地域が主体となって自ら行動する機運も低下している。

ここで言う地域コミュニティの再生とは、地縁関係等で形成されていたコミュニティの復活だけを望むものではなく、時代が求める地域コミュニティの形成をめざすものである。地域コミュニティの再生には、そこに暮らす地域の構成員である住民自らが地域の実情を学び、地域の課

題を発見し、地域をよいものに改善していこうとする「人」づくりが必要であると考えた。地域コミュニティ再生に向け、社会教育がどのような役割を果たしていけるのか、地域住民の自主的な行動を社会教育行政として社会教育的にどのように支援していくことができるのか、この視点で協議を重ねてきた。

2 地域で取り組んでいる実践活動 (社会教育委員3人の実践事例報告)

地域コミュニティの再生を考えるにあたり、まず、地域づくり・まちづくりの実態、また、その問題点を理解しておく必要がある。

地域づくりの実践事例として、活動中の3人の委員から生きた情報を得ることにより、現状の取り組み事例を共有した。

(1) 大庄小学校校区における安全・安心のまちづくり

子どもの安全・安心を確保し、心豊かな人間性を育みたいという思いから、地域の団体の協力を得て「子どもを見まもり隊」を実施している。

社会福祉協議会の方を中心に、現在ではPTAなどの各地域団体から有志約200の方が交代で、毎日75人位の方にかかわってもらっている。また、月に1回「見まもり隊推進会議」を開いて、新たな課題・問題点、改善すべきことなどの話し合いも行っている。

実施から3年半経ち、最初は安全・安心のことに対してだけであったが、今では学力問題、給食、食育などの子どもの問題等、すべてに及ぶ取り組みにより、地域の方々の教育に対する関心も高まってきた。

また、見まもり隊の他にも、地域の人たちの参加による、校内清掃や運動会の手伝いなどに常に携わってもらっている。そのなかには、高齢の方々も参加されており、地域全体が子どもの姿から元気を得ているようだ。

学校・家庭・地域のそれぞれの活動の連携によって、地域が一体となり、「まち」が活性化しているように感じる。

(2) 尾浜地区における地域通貨を活かしたまちづくり

「地域で高齢者のケアができないか」という問題意識のもと、10人程度のメンバーで2年間検討を重ねた結果、地域活性化のために地域

通貨「おう」を発行することとした。これを契機に地域全体のイベントの開催をすることができた。

他所でも地域通貨はあり、会員制の通貨で行っているところは多くあるが、尾浜地区においては、「まち」をより活性化させようと、通貨が使える範囲を名和小学校校区とし、地域全体で取り組んでいる。

しかしながら、活動の継続性の担保となる活動資金の安定確保や、各地域団体によっては、「おう」に対する理解度に温度差があるため、協力関係に不均衡が生じていることは課題である。

また、今後は、要介護高齢者サポートのシステムづくりや空き店舗活用の調査・検討を行っていく。

(3) 園田東小学校校区における子ども会夏祭りを通したまちづくり

園田東小学校校区においては、住んでいる「まち」を愛し、地域再生に向けてその先駆者となることを心がけている。

尼崎を良くしようという強い気持ちを持つ中で、小学校に地域住民の目を向けさせる仕組みづくりが必要だとの考えから、まずは、地域の人達に、行動している姿を見せて地域の良さを広めようと「夏祭り」を学校で実施している。他の地区からの参加も呼びかけ、理解を深めて、交流を広げるために努めている。

当初、学校との話し合いをしている中で、学校と地域との温度差・相互理解不足があり、横のつながりを強固にしていかなければならないと痛感して、子どもたちが地域への愛着を深めるために、地域の伝統文化を継承する一つの取り組みとして、斬新な催しを取り入れ、子どもを中心にした活動により地域の情報発信を行っている。

地域の人が見守っているということ子どもたちが肌で感じることができ、その子どもたちが地域の一員としての帰属意識を醸成していくためには、小学校区は、コミュニティを創造するのにまとまりのよい単位であると感じている。

以上、地域づくりにかかわる3つの実践事例報告を通して、地域コミュニティの現状や課題が浮かび上がってきた。

主なものとして、まず後継者の育成問題である。地域づくりのきっかけとしてイベントや事業を実施したとしても、その活動を通した継続的な地域づくりを進めるためには、後継者の存在が必要となる。

現状では、地域における諸活動のリーダーの高齢化が起こっており、これからは従前にも増して、若い人たちをいかに活動に導き、どう育て、

その活動のリーダーとなって受け継いでいってもらおうか、その仕組みづくりが課題として挙げられる。

次に、地域の中での連携の問題である。「まち」の中には、学校・家庭・地域という視点からそれぞれの教育が存在する。そして、地域づくりを進めるためには、その3点がカメラの三脚のように支えるべきものに結びつき、相互に作用することが重要である。学校・家庭・地域がそれぞれ応援しあうことで各々の行動が促進され、その行動の連携をとることにより「まち」は活性化する。

尼崎市においては、従来からその意識が高い地域、その機運が高まっている地域もあるが、それぞれの活動が自己完結にとどまっている地域も少なくはない。それぞれが情報発信機能を持ち、相互の活動情報を共有し、地域内での結びつきをどう図っていくかが今後の課題である。

3 地域で取り組むべき活動

実践事例報告を通して、地域づくりの現状や課題が表れた。その実情を踏まえたうえで、今後、地域コミュニティ再生に向けて取り組んでいくべきことはどのようなものだろうか。その活動を要点別にまとめることとした。

(1) 安全・安心な地域コミュニティづくり

成人の学びは、個人の選択において展開が可能であるが、子どもの学びは、より安全で安心な場が確保されなければならない。地域コミュニティの基盤が脆弱化している現在の状況からすれば、地域コミュニティづくりにおいて、安全・安心というキーワードが基本となる。

子どもの安全・安心を確保し、心豊かな人間性を育むという同じ方向性を持って、学校・家庭・地域が緊密な連携を図っていくことによって、見守り活動の相乗効果が生み出される。仮に、学校・家庭・地域の子どもの見守り方がそれぞれ異なっても、助け合いながら、互いを生かし合うことによって、子どもの見守りの幅が広がり、心豊かな人間性を育むことにつながる。また、地域の子どもたちを見守る活動の中から、大人たち自身も学び、人間性が育まれ、地域に温かさが生まれると思われる。

(2) 子どもや高齢者が過ごせる安全・安心の拠点づくり

最近、子どもや高齢者が犠牲になるという痛ましい事件が相次いで発生しているが、地域の安全が確保されなければ、住民は不安な気持ちとなる。そうした地域に対する住民の不安な意識がひいては、地域への信頼感を低め、地域コミュニティの再生を阻害する要因ともなりうる。

地域コミュニティの再生にあたっては、子どもや高齢者などの弱者を守るために、地域の安全を保とうと活動する人々のように、人としての優しさを持った住民が集う地域の構築が望まれる。

これにあたり、商店街は地域の一つのコミュニケーションの場でもあるが、昨今の社会構造の変化により、「まち」の商店街ではシャッターをおろす店舗が増えている状況となっている。まちの活力を維持するためにはできる限り商店街の衰退を押し留める活動が必要である。

そのためには、例えば、商店街の空き店舗の活用や商業を振興する企画など、地域自治の積極的な取り組みにより、子どもや高齢者が過ごせるスペースを設ける。また、地域の人が集まって子どもと遊んだり見守りができるようにしたりするなど、安全・安心の拠点としての機能を発展させていくことが肝要である。

(3) 地域で子ども・若者を育てていくこと

地域で子ども・若者を育てていくため、後継者を育成する仕組みを構築することが地域づくりの大きな課題となっている。その仕組みの第一段階は、若い世代に地域活動にかかわってもらえるようにすることである。

若い人たちが積極的に地域活動に参加するようになるためには、幼少時代にどれだけ「まち」に愛着を持てるかが鍵となってくる。地域の祭りやイベントなどで、そこに住む人たちと一緒に参加して楽しかった、地域の人が見守ってくれていて安心できたといった記憶が残り、それが地域に対する帰属意識となり、成人に達してからの行動に大きく影響を与えると考えられる。

(4) 大人の意識の向上と新しい地域リーダーの発掘

地域における諸活動のリーダーは高齢化が進んでいる。長年、地域のために活躍され、蓄積されてきたまちづくりのノウハウを、新しいリーダーに伝えていただかなければならない。

そのためには、今、リーダーとして活動されている高齢の方の力を

借りながら、新しい地域リーダーを発掘することが急務である。そのことを、地域の大人たちが認識しておくと同時に、それは各人の責務であることを自覚しておく必要がある。

地域リーダーを見つけ出すためには、地域の情報を共有しあえるネットワークの形成を図る必要がある。

(5) 学校・家庭・地域一体型のコミュニティづくりの推進

コミュニティづくりの推進には、学校・家庭・地域のそれぞれの行動が自己完結にとどまらずに、切磋琢磨し合い、三位一体となって地域づくりに取り組むことが求められる。

コミュニティの範囲として適当な小学校区を単位とし、「子どもを中心に」、学校・家庭・地域に「つながり・結びつき」を持つことができるような取り組みが必要である。その3者の結びつきを深めることにより地域総がかりで子どもの「全面教育」を支援する活動に結束することが地域コミュニティを押し進めていく力となる。

4 地域コミュニティ再生に必要な要素

地域コミュニティ再生に向けてのアプローチの仕方は、あらゆる分野で考えられる。その一つ、社会教育分野の中でも、地域によってその取り組み方は多岐にわたるであろうが、地域コミュニティ再生に取り組むにあたっては、社会教育において、特に3つの要素に留意しておくことが必要と考えられる。

(1) 「人・主体」

地域には、余暇時間を持っている人やこれまでの人生経験の中で蓄積してきた知識、経験を通して得られた智恵を持っている人が多数いる。その人たちが地域の課題解決のために主体的に活動するようになれば、地域をリードしていくキーパーソンの存在になる可能性は高い。

地域の中で住民から信頼されている人、「あの人がするのだったら、やりましょう」というような人が現れれば、その人が「^{かなめ}要」となり住民は共に行動する機会が増える。そして、そのキーパーソンの存在が住民に対し、普段から地域に関心を持てるように働きかけていくことで、「地域づくり」への意識が高まっていく。

また、そのリーダーシップをとる人が一人だけでなく、各場面でい

ることが重要である。多方面にわたって活動するリーダーが互いに連携することで、それぞれのリーダーのもとに活動してきた集団もつながりあう。そのつながりが地域コミュニティの再生には必要である。

キーパーソンの存在は各地域にいる、必ずいると確信する。その人たちをまずは発掘していかなければならない。また、この数年、団塊の世代が退職していく。この団塊世代の人材をいかに吸収していけるか、地域における団塊の世代の住民は一つのキーワードとなる。

キーパーソンとなりうる人材を育てる、学習した人が能力を発揮できるような条件を整えておくことは、社会教育分野の重要な役割である。ただし、いくら条件を整えても実際に活動を始めても「楽しい」と本人が感じなければ、全ては机上の空論となりうる。

地域活動の原点は「楽しい」と感じて活動できるかどうかである。

(2) 「継続性・持続性」

地域再生に向けての活動がその場限りで終わってしまっていてはいけない。例えば、イベントが盛り上がりを見せたならば、それは地域再生に向けての活動を波及させていく絶好の機会であることを忘れてはならない。

イベントは人と人のつながりを提供するには有効な一つの手段である。しかし、イベントにより地域が一時の活性を見せることは多いが、その盛り上がりを一過性のものにとどめず、そこから住民が多面的に関心を広げ、継続性を持って取り組んでいくような仕組みの蓄積が求められる。子どもの体験活動などに関しても同様なことが言える。

地域活動を継続していくには、その地域の日常生活の中に根付く取り組みにしていくことが大切な条件となる。そのためには、住民が地域でどのように暮らしていきたいかを把握しておくことは大切である。

また、あらゆる活動をするには、育児が終わって落ち着いてから、退職して時間ができてから始めようとしても、なかなか行動に移せないものである。忙しい時こそ、普段から地域について関心を持ち、日常的に地域活動をするような機会を設けていかなければ、いざという時に活動ができない。そして、地域活動は強制して参加してもらっても長続きはしない。そのため、参加しやすい実践できる活動の受け皿を整えておく必要がある。

[目次へもどる](#)

(3) 「地域の特性・独自性」

課題解決のための動機は、地域における問題・課題に関する危機感であり、その危機感を強く持っている人々が行動を起こし、地域づくりが盛んになった事例がある。

子どもの安全・安心にかかわる問題や地域団体の高齢化のように、地域には危機的な状況がいっぱいある。しかし、日常生活の中で住民はそれを危機だと意識している人は少ない。また、地域の安全・安心が課題だと大きな視点で把握することができていない。地域住民の危機感を共有することができれば、それをきっかけに、地域コミュニティ再生に向けたまちづくりを始めていくことが可能と思われる。

地域の歴史・風土や住民構成によって地域の状況や課題は千差万別であり、それぞれの地域の特性・独自性にあった取り組みの推進が必要である。そのためには、住民自らが「わが地域」意識を持ち、見つめ直すことが望まれる。

一例をあげると、市内では外国人登録者が1万人を超えているが、その中には、ニューカマー（1980年代以降の定住外国人）もあり、学校には毎年のように外国からの子どもたちも入学してくる。そのような子どもたちやその親たちは日本語を全く話せないことも多く、地域で孤立した存在になってしまうなどの地域課題となって現れる。現在、公民館で行われている日本語学級は、園田地域のベトナム難民の地域課題から発展し、大人を対象に日本語と文化についての学習の機会を提供している。ニューカマーの子どもたちのために学校の教室にもボランティアを受け入れ、学校で児童・生徒の言葉の障害に対する学習補助のネットワーク体制を整えていくといった新たな取り組みも必要かもしれない。ニューカマーの親子たちが孤立せず、まちの一員として溶け込めるように、まちが連携し合っで見守っていくことも望まれる。

このように、地域再生には、常に地域を見つめ直すことが大切であり、そこから、新たな問題の再発見がなされることが必要である。

地域コミュニティ再生に向けては、人を動かすことのできるキーパーソンの存在をいかに導き出すか、地域活動をどのようにして持続性のあるものとするか、地域が有する危機や課題を住民自らがどう発見するか、まさに組織的な教育活動によって公民として人間的成長を支援する社会教育の手法が不可欠と言える。

5 社会教育委員と社会教育行政の役割

住民が自らの意思で、自ら問題解決に向けての行動を行う過程を支援するのが社会教育の役割である。その先導役である社会教育委員と社会教育行政が地域コミュニティ再生に向けてどのように働きかけていけばよいのか、その役割とあり方について検討を行った。

(1) 社会教育委員の役割

ア 委員各自の見識を向上させ、住民の意向を把握する

社会教育委員は、社会教育的視点にたって、学校・家庭・地域が「子ども」たちをどう育てていくか、そのために「まち」をどう形成していくか、住民の意向を把握し、その検討をいっそう進めていく意識を持つ必要がある。

また、「社会教育的センス」とも言うべき、地域の現状や課題を認知し、社会教育的な活動をするこのできる能力を磨いていくことを意識し、「社会教育委員」としての見識を向上させることが大切である。

イ 現状視察や住民の意識・地域の実態を把握する

地域の状況は常に変化している。また、地域によってその状況は異なる。家庭教育のレベルの低下、地域社会の崩壊という現代的課題に、社会教育として、地域コミュニティの形成にどう関わり、どのような実践的取り組みが必要か、現状視察や住民の意識・地域の実態等を把握しておくことが大切といえる。

社会教育委員は、住民・市民として地域の実情に明るく、地域に根付いた活動を実践している。それ故に、そうした立場を活かし、地域コミュニティの中の実態を把握していくことが求められる。そして、その地域の情報や課題を行政に積極的に伝えていくべき役割がある。

ウ 委員自身の主たる活動、得意分野の活動から「人づくり」を行う

社会教育委員は、社会教育に関する様々な分野から選出されている。それぞれが主として取り組んでいる活動、得意分野を持っており、その各々の活動を通して、地域コミュニティ再生に寄与する人づくりを行っていくことが期待されている。

また、社会教育委員会議において、広く市内の社会教育の実践や

[目次へもどる](#)

課題を共有し合っており、他地域の状況を踏まえながら、個々の活動を自身の地域だけに収めずに、地域外に発信し、広げていくことをめざすことにより、社会教育活動の更なる発展を期することが肝要である。

エ 行動する社会教育委員を増やす

地域コミュニティを再生するためには、言葉だけではなく実践活動が伴わなければならない。特に、目に見える実践活動が何よりも必要である。「行動する社会教育委員」が求められている。

学校・家庭・地域という地域コミュニティがそれぞれの持つ教育力を発揮できる活動を行い、その3者の活動の連携を緊密にとっていけば、地域を動かそう・地域を変えようとする意識が高まっていくことが期待できる。

委員は、コミュニティの再生のために、学校・家庭・地域の仲人役・仲裁役として、地域活動をコーディネートする役割を担っていくことが期待されている。

オ 地域の住民が活動に取り組むような「なびく風」をつくる

地域によっては、コミュニティ再生の動きを起こすことが難しいところもある。「むら」意識が強いところでは、キーパーソンの存在がいたとしても、新旧住民の交流がうまくいかず、単発的な行事は実施できても、継続した地域活動に展開することが困難な地域もある。

そのような困難な地域でも、子どもが安全に育つようにと「子どもを核に」した活動で、住民の交流を掘り起こすことは可能であると考えられる。

そのことから、子どもを核にして、地域が活性化する「うねり」や「流れ」を起こしていく取り組みは必要である。住民が活動に参加し易い環境づくりをするとともに、地域に「なびく風」をつくることを意識しながら、住民の自立に向けた支援を行うという社会教育の本質へとつなげていくことが必要である。

(2) 社会教育行政の役割

ア 支援の方向性

社会教育行政としては、地域住民の「自助」(個人や家族の助け合いで行うこと)意識を高め、住民相互の自助意識が「共助」(地域住

[目次へもどる](#)

民同士の助け合いで行うこと)活動へと進展させることであり、「公助」(公的機関が福祉の向上のために行うこと)を必要とする人に、適時に提供システムを整備することにある。自助を補完するものとして共助、それを補完するものとして公助があり、行政サービスの質を維持するためにも、市民ができることは市民が行う、地域ができることは地域が行う、行政は市民や地域と協力して、地域の実情を理解し、地域課題の解決に向けてできることから一歩ずつ取り組んでいくことが求められる。

イ 情報を集積し、適切に提供する

行政としては、地域の現状は多種多様であることを踏まえ、その地域の現状がどうであるのか、どのような課題を有しているのかの情報収集に日々努めることが求められる。例えば、各行政区でのイベントの開催状況や統計上の客観的なデータの集積、住民の声や社会教育委員会議等による有識者の見解を十分に吸収することなどが情報収集の大切な要素となる。

そして、必要に応じて、地域再生のための新鮮な情報や「尼崎市ならではの」情報を提供していくことが大切である。この際に留意しておくべきことは、一般的に危機意識は人を動かす要因となるが、過度に不安を煽らないように適切な情報提供を心がけ、正しい危機意識を共有するように情報を公開していくことである。また、莫大な情報の中から要点を絞り、総論的や抽象的ではなく、具体的で分かりやすい提供の仕方を考える必要がある。

また、地域には様々な団体があり、日々それぞれの目的に沿った活動に励んでいるが、その活動を発表する場や団体同士で交流する場は決して多いとは言えない。そのため、各団体の取り組みを多くの人の目にふれる機会を提供できるよう、情報や場の提供を行い、地域でどのような活動が行われているのか知ってもらえるように、マスメディア等も活用した広報活動を有効に利用していくことが求められており、情報提供に係る行政の役割は大きい。

ウ 人的資産や地域の協力を生かす

尼崎市には「人」という資産がたくさんある。それはこれまでの公民館活動や地域での活動の中から数多くの人材が育成されてきた。本市には多くの社会教育施設があり、そこで多種多様な活動が展開される中で文化の裾野が広がってきた賜物であるといえる。

[目次へもどる](#)

現代社会は、人の集合体である集団も過去の地縁等による集団だけではなく、目的別に集団が結成されているケースが増えている。その目的別に集まった人たちをリードできるキーパーソンが現れれば、人は行動を起こすといわれている。

集団間で地域課題や現代課題の共通理解が生まれ、互いが高い目標を持ち、地域コミュニティの活性化・再生が可能になることが期待できる。

また、市内には3つの大学・短期大学(平成21年4月より4つ)があるが、近年の大学は、地域貢献が使命として打ち立てられ、教育活動の中に地域活動を組み込み、積極的に市民と連携を図っている。大学により積極的に協力を呼びかけ、連携を進め地域にいる「人」と地域の教育機関との結びつきがより広く、強くなり、人的資産をさらに生かすことができるようになると思われる。

エ 小学校区を単位とする地域コミュニティの再生を図り、地域社会の形成に資する

地域コミュニティ再生に向けての行政のあり方として、社会教育行政は、「尼崎市社会教育計画」を具現化しながら、市内の小学校区を単位とする地域コミュニティの再生を図っていくことを検討している。

「子^こ縁^{えん}(子どもを通じての縁)」を通して、大人同士や子どもと大人が結びついていく環境を醸成していくことが大切である。地域再生にあたって、子どもたちが、地域における様々な活動の担い手を育てる「立役者」になる可能性を秘めている。地域の子どもたちを見守る活動の中から、大人たち自身も学び育ち、学校を地域コミュニティの核とし、地域が学校を育て、学校が地域を育てるような社会的風潮を、尼崎市が率先してつくっていくことが必要である。

オ 行政総がかりで地域づくりの活動を奨励する

地域づくりの活動は、ある時点において有効な活動であったとしても、有効性が持続するとは限らない。一定期間において、活動の成果・効果を住民自ら検証し、活動を継続できるように市民の求めに応じて適切な方法を提示するなど、その活動が更に活性化するように社会教育活動の振興に努めなければならない。

地域や市全体を活性化させるために、社会教育行政は、市長部局をはじめ行政各関連部署との連携を強め、行政総がかりによる地域

[目次へもどる](#)

づくりを一層推し進めていく必要がある。行政の中で横の連携が取れていけば、それだけ支援の仕方も広がりを見せる。視野を広げ、職員一人ひとりが行政内の様々な分野に関心を持つことによって、新たな発想も浮かんでくると思われる。

さらに、古い枠組みにとらわれず、新しい取り組みや考え方を構築し、新しい地域コミュニティを創造していくために、住民・市民の意見を代表する社会教育委員と社会教育行政とが、めざすべき「地域コミュニティ再生の姿」とはどのようなものか、その到達点は何かの共通認識を持つ必要がある。地域コミュニティ再生の実現に向けて、いっそう連携協力していかなければならない。

以 上

[目次へもどる](#)

社会教育委員会議資料

本資料は、平成 19 年 10 月 31 日「第 3 回社会教育委員会議」に於いて、発表したものである。

社会教育委員 村尾典雄(尼崎市立大庄小学校)

1. 実践事例【大庄小学校区における安全・安心のまちづくり】 ～「子どもを見まもり隊」の活動を中心に～

2. 取組の動機・きっかけ

神戸事件・大阪教育大学附属池田小学校事件で代表される児童が犠牲になるという悲しい事件が発生し“安全・安心の学校神話”が崩れた。それと同時に子どもを取り巻く社会情勢が急激に変化し、子ども達の周りには基本的な生活習慣の乱れ、規範意識の低下、社会性の低下、学力の低下など数多くの問題が山積し、子ども達が心豊かにたくましく成長することが困難な状況になってきた。このような状況を考えた時、今こそ「学校・家庭・地域」の緊密な連携の中で、真の「三位一体の教育」を推進する中で安全・安心を確保し、心豊かな人間性を育むことが必要であると考えた。

【大変な時代 子ども受難の時代】 「何とかしなければ・・・」「子どもを守りたい・・・」

3. 取組の概要

「子どもを見まもり隊」活動を中心に(別紙資料参照)

- 大庄っ子 110 番「愛の一声運動」取組の開始(H.14.4～)
 - 「子どもを見まもり隊」の発足(H.16.7)
 - 「子どもを見まもり隊」推進会議(毎月第二火曜日 定例)(H.16.7～)
 - 「地域安全ホーラム」(H.17～ 毎年 1 回)・「地域感謝の会」(H.17～ 毎年 1 回)
 - 登下校見守り活動(H.16.7～ 毎日)・下校後見守り活動(H.16.7～ 随時)
- 「学校・家庭・地域そして社会全体」で担う取組 「信頼される学校づくり」
- 「大庄方式」体育大会(H.14～)、 ● 公民館との連携(H.14～)
 - スポーツクラブ 21「おおしょう」の発足(H.15)・あばれ太鼓 48 年振りの復活(H.16)
 - 「1・17を忘れない」(H.14～)、「津波避難」地域連携(H.17～)
 - 文部科学省・兵庫県教育委員会「道德教育」研究指定校(H.18～19)全国発表会
 - 「ゲームと学力アップ～家庭教育サプリメント～・・・」発行(H.18～20)

4. 取組の成果

学校応援団誕生 学校・PTA・地域コミュニティの活性化 職員の意識改革
児童の変容(心豊かに) 信頼される学校づくり 安心・安全まちづくり

5. 課題

大庄小学校と言えば「子どもを見まもり隊」と言われるまでになったが、家庭の教育力は二極化現象にある。“地域の子どもは地域で育てる”風土を更に醸成したい。

6. 今後の取組

学校を中核に、保護者や地域の支援をいただきながら学校応援団を増やし、学校・家庭・地域の連携のもとに、「全面教育」を推進し、心豊かなたくましい子どもの育成と、活力のある安全・安心のまちづくりに取組み、「学校・家庭・地域一体型のコミュニティづくり」を推進する。

【キーワード】・社会状況の激変・安全安心まちづくり・子どもを見まもり隊・全面教育・社会(地域)総がかりの教育・地域の教育力・家庭の教育力・道德教育

以上

取り組みの実践

「子どもを見まもり隊」活動

平成13年6月に大阪教育大学附属池田小学校で児童が殺傷されるという忌まわしい事件が発生した。本校では、そのことを契機に翌年4月から「大庄っ子110番の家 愛の一言運動実施中」のステッカーを作成し、地域の協力を得て見まもり運動を押し進めてきた。

平成16年4月からは、地域に呼びかけ地域ボランティア200名からなる「子どもを見まもり隊」を発足させた。発足以来、丸3年が経過した。今では、大庄小学校と言えば「子ども見まもり隊」と言われるまでになってきた。

当初「子ども見まもり隊」活動は、子どもたちの登下校の安全・安心の見まもり活動を想定した活動であった。活動が活発になり取組が定着してくると、そこには様々なドラマが生まれ、人と人との「絆」が育ち、大人も子どもも「育ち・育てられる」関係ができ上がり、家庭・学校・地域の関係づくりに絶大な効果が生み出されてきた。

(1) 組織

構成組織は、社会福祉協議会、民生委員、児童委員、少年補導委員、防犯委員、保護司会、婦人会、老人会、子ども会、PTA、スポーツクラブ21おおしょう、教職員の12団体の内、主旨に賛同したボランティア200名からなる。

(2) 活動

- 登下校の見回り活動及び下校後の安全パトロール
- 定期的な夜間パトロール
- あいさつ、声かけ運動
- 健全育成啓発運動
- 「子どもを見まもり隊」推進会議

推進委員 …… 各種団体の長

定例会議 …… 毎月第2火曜日 10時～11時

協議内容 …… 登下校の様子 学校や地域での子どもの様子 地域の実態や行事
学校の現状や行事 活動を推進する上での課題や問題点 新会員の紹介
子育て情報交換など



(3) 子どもの変容

- 子どもたちが安心して登下校できるようになった。
- 子どもたちの表情に笑顔が見られるようになった。
- 子どもたちの表情に活気が見られるようになった。
- 子どもたちが、多くの地域の方々と同顔見知りになった。
- 子どもたちと地域の人たちとの心の交流が生まれてきた。
- どの子も、あいさつがしっかりとできるようになった。
- 登校時刻が守られ、遅刻してくる子どもが殆どなくなった。
- たくさんの人に見守られ、支えられて生きていることが身をもって分かってきた。
- 感謝の気持ちが自然に芽生えてきた。
- 年長者とのふれ合いが生まれてきた。



(4) 大人の方々の感想

- 子どもから元気をもらっている。
- 子どもたちと毎朝顔を合わせることが何よりも嬉しい。
- 多くの子どもたちと顔見知りになれた。
- 子どもたちが「ありがとう」という言葉をかけてくれて、勇気づけられる。
- 都合で一日「見まもり隊」活動に参加できないと、次の日には、子どもたちが「昨日は居なかったね」と声をかけてくれる。
- 子どもたちの笑顔が、何よりも宝物です。
- 孫のような子どもたちが、元気に登校してくれる姿がうれしい。
- 子どもたちが家へ遊びに来てくれるようになった。
- 子どもたちとお手紙のやりとり(文通)をしている。
- 敬老の日には、子どもたちがバラの花をプレゼントしてくれた。
- 子どもたちの元気な姿を見ていると、頑張らなければと思えば元気がでる。

(5) 教師・保護者の感想

- 雨の日も風の日も暑い日も寒い日も、子どもたちを見まもっていただき、とても感謝している。
- 安心して子どもを送り出すことができる。
- 地域の方々に、子どもたちを見まもっていただき、とても感謝している。
- 子どもの表情が明るくなった。
- 元気なあいさつができるようになってきた。
- 登校時刻に遅れることなく、登校できるようになってきた。
- 地域の方々が子どもたちを見まもってくれているので、私たち保護者自身も親として今まで以上に、できる活動に取り組んでいきたい。
- 地域が活性化してきた。
- 学校・家庭・地域の連携がより強まってきた。

(6) 「子どもを見まもり隊」がもたらした効果

「子どもを見まもり隊」は発足以来 4 年目に入る。今では大庄小学校と言えば「見まもり隊」と言われる様になり、大庄小学校の代名詞にまでなってきた。昨今、地域も様変わりし、人間関係も希薄になった。「隣は何をする人ぞ」の世界である。しかし、本校の校区は「子どもを見まもり隊」やPTAの「スマイル隊」の緻密な行動の連携により、子どもたちが大きく人間的な成長を遂げつつある。また、本校を取り巻く地域コミュニティも活性化してきている。行動の連携を推進することで、地域の人々との出会いがあり、そこにドラマが生まれ、大人も子どもも心の絆が一段と強固なものになってくる、と言う、大きな財産ができつつある。

私たち、教職員と子どもたちは、日頃見まもっていただいている地域の方々や保護者、関係機関の方々に対して、少しでもお返しができればと考え、毎年、オーケストラを招いて「地域感謝の会」や「交通安全感謝の会」を催し、感謝の意を表している。地域の方々は、この日をとても楽しみにしており、多くの方々に集まっていたりしている。この場は、「子どもたちと地域の方々との交流の場」でもある。

[目次へもどる](#)

社会教育委員会議

「地域で取り組まれている実践事例」

社会教育委員 塩見 幸治

1. 実践事例名

「地域コミュニティ再生に向けた地域通貨おう発行事業」

2. 取組の動機・きっかけ

- (1) 地域で高齢者のケアができないか…という問題意識。
- (2) 尾浜商店街のシャッター化。
- (3) NHKドキュメント「エンデの遺言」で地域通貨による地域自治。コミュニティの構築が図られている実例が放映されていたこと。

3. 概要

2003年8月、「尾浜地域活性化研究会」が地域の有志によって結成され、尾浜公民館で月1回のペースで勉強を重ねました。そして、2005年2月に「地域通貨発行計画案」を策定し、地域の各団体に検討していただきました。そして、同年10月には「地域通貨おう委員会」が発足し、地域通貨の発行準備を進め、2007年3月21日に「おうイベント」を実施し、同日、地域通貨「おう」がスタートしました。スタート時点での発行高は3,000枚でしたが、2008年3月末では発行枚数約18,000枚、流通枚数は約13,000枚程度になっています。

発行主体である「地域通貨おう委員会」は地域の諸団体（尾浜連協、尾浜互助会、明和小PTA、尾浜商店会、尾浜消防分団、民生委員尾浜地区協議会、その他、地域の福祉法人、ボランティアグループ）の代表者等で構成されており、そのもとに事務局を設置し、実務を遂行しています。事務局スタッフは、スタート時は6人でしたが、現在では14人に増えています。

また、この活動を契機にして、これまでできなかった、地域全体のまつりを実施できるようになりました。

4. 課題

- (1) 会員制ではなく、地域全体を対象としているため、地域団体、単位社協等において、理解度が異なり、地域通貨「おう」の諸活動に対して相当の温度差や「しくみ」に対する誤解等があり、協力関係において不均等な状況が生まれています。
- (2) 地域における諸活動のリーダーが相当高齢化しています。上記(1)にも関連しますが、そのことが、地域活動の不活性化の要因となっています。また、ネットワークの形成、ノウハウの蓄積、新しい地域リーダーの発掘等、の弱さが見られます。地域コミュニティ再生に関して、人材の発掘は急務です。
- (3) 現在、公的補助金をいただいて活動を続けていますが、活動の継続性の担保となる活動資金の安全的確保を早急にはかる必要があります。

5. 今後の取組

- (1) 地域通貨「おう」を発行することによって、「“おう”を流通させ流通枚数を拡大させる」という新たな課題が生まれます。具体的には、「おう」ボランティアメニュー、スタッフの拡大、「おう」協力店の拡大ということに取り組まなければなりません。現在、その作業に取り組んでいます。

[目次へもどる](#)

- (2) あわせて、「おう」を利用した、地域での支えあいシステムの構築を目指さなければなりません。今年度後半からは、モデル事業として、要介護高齢者の地域生活をサポートするためのシステムづくりを手がけます。(1人の要介護高齢者に地域のボランティアスタッフ3~5人が対応するシステム)地域包括支援センターとタイアップして実験したいと思っています。
- (3) 尾浜商店街の空き店舗を活用し、地域コミュニティの構築に寄与できる「コミュニティショップ」を立ち上げるための調査検討を行ないます。
地域通貨「おう」の活動の自立も視野に入れた“二兎を追う”話です。
- (4) JR尼崎駅北のオープンで、尾浜商店街は息の根を止められる危険性があります。尾浜商店街の今後の存立において、新しいコンセプトを開発し、尾浜商店会をはじめ、地域の合意形成をはかる必要があります。
尾浜商店街のありようが今後の尾浜地域のコミュニティのキポイントになると思われます。

[目次へもどる](#)

地域で取り組まれている実践事例

社会教育委員 平良 一夫

1. 実践事例名

子ども会夏祭り

2. 取組の動機・きっかけ

- 小学校の適正規模、適正配置による統合校区編成に伴い地域の偏見を見直すための取り組み。
- 保護者、並びに地域の大人達が「戸ノ内地区に対して生活圏が違う学校へ子供たちを通わせることはできない」と言う地域の偏見があった。
- 偏見を持つ地域住民に対し、説明に入っている市議員、市職員の対応に対する疑念。
- 言葉で反論するのではなく、我々の行動で地域の良さを人々に知らしめようと取り組んだ。

3. 概要

- 偏見を持つ人たちに対し、「偏見の垣根を取り払う仕組み」を見せるための目的。
- 地域の全ての人を巻き込み他の地区にない斬新的な催し物を取り入れた。
- 昔からある盆踊りを中心に地域の伝統文化を継承する。
- 他の地区からも自由に参加していただけるように配慮し、ゴンタな子ども、駅前で踊りや、歌を歌っている若者も気軽に参加できるようにした。
- 子ども会、学校、社協、老人会、婦人会、PTA、開放など各諸団体の方々を巻き込み、地域の絆「横の繋がり」を強固にすることを目的とした。
- 子どもたちや高齢者の方を大切に守り人情味があり、人としての優しさを持った地域であることを示す良い機会だと思い、皆で汗をかき子どもたちのために起こした祭りです。

4. 課題

- 継続の難しさ。(同じ人たちが何時までも先頭を切っていくことはできない)
- 後継者の育成。

5. 今後の取組

- 若者を育てていく難しさは有るが、小さいときから大人達が子どものために頑張っている姿を見せることで、継承する子供たちも出てくるものと信じております。
現実に2,3人の若者が必ず混じってお手伝いをするようには成ってきました。
人として生きていく中での人間同志のつながり、絆、をこの地域から変えていく姿を他の地域に発信していきたいと考えている。
この祭りをきっかけとして、地域住民が「おらが町が尼崎市一いや日本一の地域だ」と自慢のできる夏祭りを通じ、日本人が誇りとしている、心の優しい、心の通った町「戸ノ内」にしていきたい。

[目次へもどる](#)